特集1　教研まとめ報告

行学二道と報恩の教化に結集

―第十二回中央教化研究会議のまとめ―

新間智照

第十二回日蓮宗中央教化研究会議は、日蓮聖人第七百遠忌を二年後にひかえた昭和五十四年十月二・三日（火・水）の二日間、身延山久遠寺および西谷各坊を会場として、「七百遠忌報恩身延教師結集大会」として、三百二十名の本宗僧侶教師が集まって開催された。

「ご遠忌正当までに、宗祖棲神の身延山で教師大会となるべき教研会議を開き祖廟に誓願しよう」という希望立案は、数年前より語られていたのであるが、例年の手なれた中央教研開催と異り、三倍以上の参加者を地理的に分散した会場に配置して行うため、その運営には準備段階より苦労と不安がつきまとったのであった。

そして、つつがなく、「七百遠忌報恩の誠を祖廟に捧げ、報恩のための教化活動に取組む誓願を新たに」するという開催主旨の通り、「祖廟に誓う」厳粛さと真剣さに満ちて、予期以上の成果を収めて幕をとじることができた。

前日より準備

すでに幾回か宗務院において運営委員会が持たれ計画が進められて来たが、いよいよ前日は会場現場での準備のため運営委員会が開かれた。十月一日午後より数十名の運営委員が会場設営と運営打合せに当った。折あしく新幹線不通事故等で参集の遅れる委員も多く、

現場での事前の打合せは必ずしも充分ではなかった。さらに、参加者への案内に「昼食は各自すませて来る」の注意書きが脱けていたため、当日指定時刻に参集した者の一部は、結果として昼食をとれないまま行事に加わるなどの開始時のつまづきはあったが、しかし全体としては、宗務当局・身延山関係諸聖・運営委員よく一体となり、熱意ある準備と運営をもって、大会を成功に導く大きな陰の力となったようである。

大会は唱題行進より始まる

十月二日正午、本部のおかれた武井坊をはじめ、智寂坊・岸之坊・北之坊・林蔵坊・樋沢坊・麓坊・清水坊・本行坊の九宿舎に全国より集った参加者は、素絹・木蘭五条の質素な、しかし僧侶本来的な服装に威儀を正し宿坊前に整列、参道の下位にある坊より順次発進、つぎつぎと列の後部に合流、布教研修所生の打つ太鼓に合せて二列縦隊も整然と、唱題行進で坂を登り、一般参詣者が思わず立止って合掌し見守る長蛇の行列となって、本山久遠寺の受付へ到着した。三百名もの、いわばぶっつけ本番の行進にもかかわらず、整然として感動的な唱題行進であった。

祖師堂にて開会の報恩法要を厳修

客殿で小憩の後、祖師堂をぎっしりと埋めて三百名が着座、十三時より開会法要として第七百報恩法要が厳修された。身延山総務竹下真孝猊下大導師のもと、身延山秋山智孝庶務部長・岩間湛良布教部長脇導師にて、教師三百名の力強い読経(方便・寿量・神力別付)唱題、大導師の啓白文も厳かに法味が捧げられた。

つづいて松村寿顕宗務総長・竹下真孝身延山総務・松岡堯雄山静宗務区長の挨拶をいただき、玄題三唱にて開会式を終り、御真骨堂経殿前石段で記念撮影、次の会場へ移った。

全体集会で基調報告

十四時三十分、身延山短大講堂において全体集会に入り、渡辺一之教務課長司会のもと風間円静教部長・持田貫宣遠忌奉行局長・中濃教篤現宗研所長の挨拶のち、現宗研顧問近江幸正師による基調報告が行われた。

「現代の危機とそれに立ち向う伝道教団づくり」と題して、

一、報恩の実践は伝道教団の実動体制をつくることで

ある、と前置きして、

二、立正安国の祖願を現代に活かそう。他の祖師方が末法の衆生を「無智悪人」と見られたのに対し、日蓮聖人は「邪智謗法」ととらえられ、立正安国の国家諫暁を教化活動の軸とされた。この祖意を現代に活かすには、

三、現代の危機状況を見つめよ。現代はさらに邪智謗法の業果が人類滅亡の危機として現れており、環境破壊・人間疎外・エネルギー危機等の深刻さもさりながら、核兵器による人類滅亡の危機は最大のものである。それを考えるとき私たちは、

四、立正平和の課題にとりくもう。現に苦しみ悩んでいる民衆を救おうとすることを忘れてはならない。危機に苦しむ民衆の中に入り、共に悩み、共に語り、共に実践する姿勢が必要で、それには教師自身の自覚が第一である。だから、

五、寺檀関係の体質改善と教師の自覚的な信行学・教化実践から始めよう。旧態依然たる寺院・教団の体質体制を改革し、寺院を真に伝道の拠点とする試みが必要である。檀家の家長夫婦に限られた教化活動から、社会へ開かれた伝道教化に脱皮するため、そして、教師の学習と教化活動の協同化をはかる場として、「教化センター」が意味をもつのである。護法運動の実践としての統一信行をよりよくしてゆくのも教化センターの課題である。最後に、

六、人材教育にとりくもう。教団の現状では子弟の訓育が困難となり、法器養成のカリキュラムの確立が急がれている。さらに、各地の教化活動の実践の場で青少年教師の育成が大切である。

以上、問題を指摘したが、討議により問題を明確にし、深め、具体化されたい。

と、過去十一回の教研討議を踏まえての格調ある基調報告がなされた。

ついで本名瀬寛明師による日程説明があり、全体集会を終了、十六時ふたたび唱題行進で下山した。

六分科会に分れ二日間の討議

宿坊に帰り道服に改めたのち、九坊中の六坊を会場として分科会討議に入った。分科会テーマは、

1、寺檀問題と教化活動

農村及び都市寺院の実態を見直し、寺檀関係の在り方と教化に取組む寺院活動の方策を再検討することにより、現代に生きる「日蓮一

門」づくりをめざしてゆく。

2、子弟教育と法器育成

教師間の子弟教育、後継者問題及び宗門の法器育成機関の現状を把握し、「法の担い手」であり宗門の次代を背負う人材の教育活用と教化実践に取組む教師間の研究交流と組織強化を推進する。

3、現代の家族関係と幼児、青少年教化

現代の家族、家庭問題の実態を明らかにし、幼児、青少年教化の方策を具体化することにより、家庭ぐるみの信仰に励む日蓮宗の信徒づくりをめざす。

4、日蓮聖人の報恩精神と七百遠忌

報恩、誓願、諫暁、立正安国をかなめとする日蓮聖人の信仰実践と教えを学び、七百遠忌事業の内容を再確認し、その現状を把握することにより日蓮聖人の報恩精神を弘める教化研究活動を推進し、七百一年以後をめざす活動計画を具体化する。

5、日蓮宗の現状と教化活動の組織化

宗門における布教伝道と諸機構の現状を見直し、教化活動を推進するための全国及び管区の組織化と「教化センター」の設置と実動を図り、遠忌以後をめざし「教師中心の教化本位による伝道教団」づくりを実現する計画を提示する。

6、現代社会の諸問題と教化

現代における社会問題の実情を明らかにし合い、教師の社会的姿勢や社会的、地域的活動を見直し、宗門における社会的実践、立正平和運動等の方策を示す。

以上の六テーマに分れ、各分科会約五十名が、第一日午後の二時間半、第二日午前の三時間計五時間半の討議を行った。各分科会は、まず発題者（二～三名）の発言から始められ、教研会議への参加は初めてという教師もかなり参加していたにもかかわらず、真剣な熱のある討議が続けられた。その内容は各「分科会報告」に見られる通りである。

ただ、運営上の問題として、今回の分科会参加は、必ずしも各自第一希望の分科会に出席できたのではなかった。全国三百名の参加者から事前に希望申込をとって配分調整する、という運営手続の余裕がなかったからである。

この反省から、来年以降の参加と地域日常での教化

研究の組織化の参考に資するため、分科会の席上で「どの部門に関心が深く希望するか」のアンケート用紙を配布して回収した。これが、数年前より教研会議で要望されていた「部門別継続研究と教材作成」への第一歩になれば幸いである。

感動的な夜の御廟前唱題行

第一日目十九時に分科会が終って、各宿坊で入浴・夕食ののち、二十時三十分、小雨の中を全員整列、ご廟所へ向う。人数と天候等の関係で、石畳に正座しての唱題行はできなかったが、祖廟拝殿で直立合掌し、風間教務部長導師のもと、三十分に足りない時間であったが、自我偈読誦・唱題をささげ、誓願回向申しあげた。終っての部長挨拶には抑えきれない感動があふれ、また聞く全員の胸にも、いまこそご廟前に教師結集して誓願のお題目を唱え奉った厳粛な思いが消えやらぬのであった。身延結集のクライマックスであったといえよう。

帰坊二十一時三十分。解散就寝であるが、十数名の運営委員は夜更けまで打合せの会議を持った。

本山朝勤に随喜参列

明けて第二日十月三日、四時半起床、六時からの朝勤に大事をとって（雨天であるし）五時整列出発したので、祖師堂で三十分待つはめになったが、三百名の教師が式衆には入らないが、道服折五条で随喜参列、すがすがしい朝勤の法味をささげた。折しも本山朝勤は部経であるため、経本が手元にない随喜衆として、心ゆくまで読誦できなかったのが残念ではあった。

下山はもちろん登山と同じく唱題行進。帰坊して朝食、八時三十分より分科会を再開して三時間、また帰坊して昼食と、あわただしい中にスケジュールが予定通り消化されて行った。

全体集会で祖廟に誓願する「大会宣言」

いよいよ最終の全体集会・閉会式に移る。十二時二十分整列、祖廟に向う。拝殿に直立整列して十三時全体集会に入る。今回は廟前の全体会であるため、「宣言文」をここで討議採択するという形をとらず、あらかじめ参加者に了承をお願いして、分科会の内容を反映させながら運営委員会が起草成文の責任をもって作成した「大会宣言文」をご廟前に朗読発表して、参加者

全員の誓願とするという形をとった。

渡辺教務課長司会のもと、玄題三唱ののちその旨説明があり、「第十二回中央教化研究会議七百遠忌報恩身延教師結集大会宣言」が代表新間智照師によって祖廟に向って朗読された。それは、三百二十名の本大会参加者が討議の結果の、報恩行としての教化活動の決意を、まず宗祖の墓前にはっきりと言葉に出して誓い、同時にそれを内外に宣言し、これからの各自の行動の指針にするという行為であった。

「大会宣言」は別掲のごとくであるが、前文で本教研会議結集大会の六つのテーマとその討議内容をまとめ、基本的な目標と課題を明らかにした。さらに後半は、その目標と課題に応えるための具体的な努力目標を十一ヶ条にわたって設定したものである。

朗読ののち、全員の誓願と決意を示すため玄題を三唱し、全体集会を終り、閉会式に移る。「如日月光明……」と法味言上の後、風間教務部長の挨拶は昨夜に劣らぬ感激と決意の表明であった。ついで中濃現宗研所長より、会議の内容が宣言文にまで凝結された喜びと、この宣言文の内容に今後尽力してゆくことを共に誓おうと挨拶があり、玄題三唱をもって本大会のすべてを終了し解散したのである。

本大会の意義

予期以上の成功を収めた今大会のもつ意義を総括してみよう。（以下の七項は、石川師の総括メモを参考にしました。）

①この成功は、過去十一回の中央教研会議、九宗務区にまで広がった地域教研会議の積重ねと拡充、第七回教研宣言以来の教化路線、現宗研嘱託会議を中心とした準備などに基づくものと、これまでの教研会議に支援協力参加してきた教師の活動の集約であった。

②今回は人数も多く、会場・宿舎も分散してたえず移動を伴ったにもかかわらず、比較的円滑に運営されたのは、教務部・現宗研・運営委員の協同運営体制があり、資料の事前配布、布教研修所生の協力、座長から宿泊責任者に至る役配担当者の努力などが結集されたからである。

③三百二十名という参加人数も開催運営に有利であった。もっと多人数であれば受入れ体制に不備が生じたかもしれないし、少人数すぎればこれほどの熱気は生まれなかったかもしれない。三百名の結集は、日蓮宗教師の底力を示すものであり、よくまとまりうる人数で、全員が大会に感動し連帯感を強めた貴

重な体験であった。

④内容については、「身延教師結集大会」として開催され、宗祖の廟前にことに報恩誓願の意識を強められた。教師による教化の研究・実践こそが伝道宗門を確立するものであることが明かにされ、七百一年以後の80年代の教団づくりへ展望がなされた。

⑤素絹五条着用の遠忌法要と廟前の唱題行を修したことは、本大会に特別の感動と意義を与えた。教研会議において初めて本格的な〈儀式と行法〉がとり入れられ、〈行学二道と教化〉にとりくむ路線が実行されたといえよう。

⑥「身延大会宣言」を採択したことも特記すべきである。これは、理念や基本方針の宣言にとどまらず、七百遠忌とその後の教化の方向を、具体的な実践目標を掲げることによって打出している。

⑦その実践目標として、個々の部門での目標とともに全体として、

(イ)中央・地域教研の定着と拡大

(ロ)「教化センター」の設置と実動

(ハ)「分野別担当体制」にもとづく教師の連帯と組織化

(ニ)立正安国の祖願を生かす社会実践

などの目標が提唱され、課題として明かにされたが、これが実行されて行けば宗門の未来を開く大きな原動力となるであろう。

以上のべたごとく、この第十二回中央教化研究会議身延教師結集大会は、きわめて大きい成果を収め、明日の宗門の方向を明らかにしたということができよう。